



お茶の水聖書学院同窓会

OB I 同窓会 NEWS Letter

2015年
2月発行
No. 38

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル2F

TEL.03-3296-1005 FAX.03-3296-4641 発行者 藤原 導夫 編集者 有田 貞一

サポーターがいなかったら

テレビではありますが、たまにサッカーの試合の様子を観ることがあります。ピッチというのでしょうか、あの広いフィールドを、間に15分の休憩をはさむものの、90分間走り回る選手たちの体力とそのエネルギーはすごいといつも思われます。と同時にそれを応援するサポーターたちの熱気ぶりに感心させられます。雨が降ろうが風が吹こうが、その試合の間中声を潤らして、時にはずーっと飛び跳ねながら応援しまくるあの姿には感動さえ覚えるぐらいです。選手たちの懸命なプレイは、この熱烈なサポーターたちの応援があればこそでありましょう。そこにプレイする選手も応援するサポーターも一体になっている姿を見る思いがするのは私だけでしょうか。



出エジプト記の17章にこんな記事があります。ヨシュアの率いるイスラエルがアマレクと戦うという場面です。イスラエルが戦っている間中モーセは丘の頂にのぼり、そこで手をあげてとりなしの祈りをささげていました。そこには「モーセが手を上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を降ろしているときは、アマレクが優勢になった」と記されています(11)。しかしモーセも人間ですので体力、気力には限界があって手が重くなり、ずーっと手を上げ続けるのは困難になったというのもわかります。

そうするとイスラエルの旗色が悪くなるわけですので、同行していたアロンとフルが石を持ってきてモーセを座らせ、そしてアロンとフルの二人はこちら側とあちら側とから「モーセの手をささえた」というのです。それでモーセの手は「日が沈むまで、しっかりそのままであった」ので結果は連戦連勝ということでありました。戦ったのはヨシュアの率いる民たちであったわけですが、しかしほんとうの勝因はモーセのとりなしの祈り、そして同時に、そのモーセの手を両側から

OCC理事長 村上宣道

しっかりと支え続けてくれたアロンとフルのサポートがあったからということを忘れてはならないでありましょう。

新約聖書に目を転じますと、回心したばかりのパウロに関して、サポーターのおかげで命拾いしたという記事が「使徒の働き」の9章にみられます。キリスト教撲滅運動の急先鋒であったパウロが、ダマスコ途上で主キリストに出会ってから一転して「諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた」というのですから、まわりの者がみな驚いたのも無理はありません。特にユダヤ人たちはパウロを裏切り者と断じて密かに殺す相談をし始め、「昼も夜も町の門を全部見張っていた」というのです。そのことを知った「彼の弟子たちは（もうすでに弟子がいたというのも驚きですが）、夜中に彼をかごに乘せ、町の城壁伝えにつりおろした」とあり、おかげでパウロはその命の危険から逃れることができたのでした。彼の弟子たちによる決死の行動は、キリスト教史上に実に大きな貢献をしたことになるのです。もしもこの時パウロのいのちが助けられていなかったら、世界の宣教はどうなっていたか、果たしてキリスト教が今日存在しえたかというほどのことであります。まさに今日のキリスト教が存続しているのは、この名もなきサポーターたちのおかげであるということができるとは思いませんか。

私が申し上げたいことはもうおわかりでしょう。OB Iの同窓会、同窓会とは本来卒業生たちの交流を目的とする会なのでしょうが、OB Iの同窓会にはそれ以上の期待が寄せられていることを、同窓会のみなさんは既によくご存じでいらっしゃると思います。OB Iの同窓生たちは、他に類を見ないのではと思うほどOB Iを愛している方々であることを見聞きして誇りに思っています。これからもお一層強力なサポート集団となつてくださることを信じて疑いません。サポーターの存在がどれほど大きな役割を果たすものであるかをみなさんは良くご存じだからです。

「OBI卒業後、20年の軌跡」

平松 庸一（第2期生）

この度は、OBIニュースレターにて証しの機会を与えてくださりありがとうございます。同窓会の有田兄をはじめ、諸先生、多くのOBIを支える皆様に感謝申し上げます。

わたしは、1995年にOBIを卒業後、会社設立（1996年）、闘病生活（1999年～2000年）、博士学位取得（2005年）を経て、2006年からは地方国立大学の教員をつとめています。専門は人的資源管理という領域ですが、現在の関心領域は、組織における人間に焦点を当てつつ現象学、倫理学からのアプローチの可能性を模索しています。

以前にもOBIニュースにて証しさせていただきましたが、わたしは2000年10月に凄まじい14か月に及ぶ闘病を経て（60リットルの輸血と右足切断）死線から復帰することが出来ました。わたしはこの経験を通して「われは神なり」という父なる神の荘厳さを深く体験しました（ヨブ記）。これは魂の深いところからえぐりぬかれ確信へと導かれるもので、わたしのその後の人生を大きく変えました。まさに「神はある」（出エジプト3:14、ヨハネ13:19）という真理です。ある時この証しをさせていただいたとき、ある夫人が「神様はいらっしゃる」という表現が正しいのではないのかと質問されました。しかし、わたしを死線から救いだしてくれた信仰は、そのような上品な表現であらわされるものではなかったことをここに改めて証しさせていただきます。この経験を経て、善いサマリア人のたとえ（ルカ10:25～37）がより近いものとなりました。わたしが善きサマリア人になるべく努力せよと主は求めておられるのではなく、わたしこそが追いはぎに襲われ、服をはぎ取られ、殴りつけられ、半殺しにされたその人であり、99%を超す我が国のノンクリスチャンの方々によって命救われた者であったということを知られたのです。この事実感謝をもって応答すべく、「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカ10:37）というイエス様のお言葉がわたしの心に響いているのです。指でボンと押せば倒れてしまうような弱い男を、主はもちいてくださるのです。故・増田誉雄先生からOBIの裏方で少し働いてくれないかとお誘いを受け、数年間誉雄先生、そして素晴らしい諸先輩といっしょに本当に微力な仕事をさせていただいた経験は、わたしの大切な信仰による戦いの一ページとなっています（ガラテヤ5:22～23）。

このような者が今大学で教員をしています。学生の皆

さんは貴重な体験をわたしにさせてくれます。非常に深刻な病気にかかり生死に苦しむ学生。家族のことで悩んでいる学生。人間関係でうまくいかない学生。問題はさまざまですが皆りっぱに生きています。次のような報せもありました。「先生、ありがとう。僕は大学に入ってからとても寂しい生活を送っていました。もし平松先生のゼミに入っても僕の居場所がなかったら、静かに去ろうと決意していました。今ようやく僕の居場所をこの大学に見出すことが出来ました。今では毎日の大学生活が楽しくてしかたありません。ありがとうございます。」といってくれた男子学生もいました。ひとりひとり皆違うのですが、わたしは彼らから多くの思い出の素敵なプレゼントをいただいています。

最後に我が家のことを少し触れさせていただき筆を置かせていただきます。長男も次男も野球少年で、二人とも新潟代表として甲子園出場に恵まれました（長男は2009年夏準優勝、次男は2014年夏ベスト4）。二人ともレギュラーには届きませんでしたが、よく最後まで頑張ってくれました。妻は、近くの病院で看護師をしておりましたが、2015年4月から大学院進学を決意し、成熟社会における訪問看護を研究したいと申しております。母は、これまで奈良の地にて一人暮らしをしていましたが、昨年2014年11月救急車&レスキュー隊のお世話を受け、命が救われました。かなり痴呆症が進んでいるので新潟に引き取りました。昨日のことを忘れてしまう母ですが、大切な母の世話をさせていただけることに感謝をしつつ生活をしています。母の引越しの整理をしているときに、2冊のノートが出てきました。「○月△日よういち君、なほこさん、ありがとうございます。」と毎日毎日、この短い同じ言葉が繰り返し綴られてあるのです。同じ言葉で埋め尽くされているノートの一ページページをめくりながら母の愛に心が熱くなりました。「母さん、ありがとうは僕の方こそあなたに贈る言葉です。」と奈良の地でとめどなく涙が止まりませんでした。

OBIを卒業して20年目をむかえます。多くの感謝でいっぱいです。多くのことを学ばせていただきました。未完のOBI卒業論文「愛のマネジメント」を完成させるべく、これからも頑張ります。感謝しつつ。 在主

「主の恵みに支えられて」

小千谷キリスト宣教会 阿部 幸平（第16期生）

2005年4月、お茶の水聖書学院通信科に入学させていただきました。DVDによる学びのときが与えられ感謝でした。夏期スクーリングでは信仰の先輩の方々との交わりを通して、多くのことを学ばせていただきました。

小千谷キリスト宣教会は豪雪地帯にあります。背後に標高300メートルの山本山があり、秋には猛禽類の渡りが見られ、上昇気流に乗って空高く渡ってゆく姿は壮観です。360度のパノラマは素晴らしく雄大です。どこかイスラエルの風景に似ているそうです。小千谷キリスト宣教会の戦いは雪との戦いとも言えます。毎年12月から3月中旬までの4か月間、雪が降り続きます。一晩で1メートル積もることも数回ありますが、その夜は物音一つせず、シンシンと雪が降り、その静けさは神秘的です。春までほとんど太陽を見ることは出来ません。太陽は週に数時間姿を見せるだけです。毎日灰色の雪雲を見てると、ともすれば精神的に落ち込み信仰が弱ることがあります。しかし忍耐していれば、やがて春が来て花が咲くこと知っています。まるで主の再臨を待ち望むように。教会の信者さんは灰色の雪雲の下で黙々と忍耐を持って礼拝を守っています。小千谷の地で開拓伝道が始まってから43年になりますが、礼拝出席者はわずか6人です。なかなか信者が増えないでいます。3年前に牧師が天に召されて無牧教会となりましたが、無力な私ですが責任者として教会を守り、礼拝のメッセージを取り次ぎ、冬季は教会の除雪をしています。教会と自分の家の二軒分の除雪はかなりきつい仕事です。Iコリント15章58節「私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあるに値するのを知っているのですから。」だれも見えていなくとも、天に宝を積む者でありたいと願っています。そして神様は私の心を新しく造り変えて、奉仕する力を与え、また主を喜ぶ心を与えて下さいました。

今から19年前の42歳のとき胃がんのため胃を全摘しました。手術後食事が食べられず、15キロ痩せて42キロとなり生きてゆけるか大変不安になりました。しかし、「彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみの上に彼とともにいて、かれを救い彼に誉れを与えよう。わたしは、彼を長いのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう。」詩篇91編15・16節。尊敬する相田正枝先生の証と、この御言葉によって、神様が守ってくださるから大丈夫だという確信と平安が与えられました。会社で仕事の途中、腸の動きが弱り、腹痛のため立っていることが出来ずにかがみこむことが時々ありました。そのとき神様は奇跡を起こして腸を動かし、癒しの御手をさしのべてくださいました。ローマ8章37節「しかし、私たちは、私たちを愛して下さった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」主の御用をするには、自分が弱く小さな器であり失望する毎日ですが、「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」イザヤ41章10節。御言葉に励まされて、自分独りではなく神様がそばにいて助けてくださることを知り、感謝しています。神様の恵みに支えられて雪深い小千谷で福音伝道に励み、救われる人が起こされることを信じて福音のために奮闘しています。

「私の死生観」

福井 ちよ（12期生）

祖母幾代は明治16年代々前田藩家老職の野口家に生まれた。東京の女子学院で矢嶋楯子師の薫陶を受け、東京芝の聖書学館で学び、卒業後は米国宣教師の通訳として働く。大正2年にクリスチャンの橋本金太郎が、幼子3人を残し妻が亡くなり困っていると聞き、京城（ソウル）に嫁ぐ。私の父を始めとして更に女二人、男一人に恵まれるが、末の男子が5歳の時に赤痢に罹り、看病していた幾代も感染し亡くなる。昭和2年9月10日享年45歳だった。当時のことを京城日本基督教会の秋月牧師は次のように葬儀説教で語っている。

（～今回病を得て総督府医院に入院なさったのは8月25日でありました。

そうして、病症激烈に進み、～「今晚持ちこたえるのは難しいかもしれません」と10日の午後の電話で、私共病院に駆けつけましたのは2時でありましたが、病は非常に進んでおりました。酸素吸入をしておられましたが、夫人は医師に向かって「治らないなら、もう、それはやめてください」と言われました。その時、橋本君は夫人の耳のそばに静かに「生も死もない、永遠の命があるのみではないか」と言われますと、夫人は「私は永遠の命を信じます。基督を信じます」と言われたのでありました。私は聖書エペソ書2章8節「汝らは恩恵により、信仰により救われたり、これ己によるにあらず、神の賜物なり」そこを読んで「恵みがわかっていますか」とお尋ねしましたが、夫人は「わかっています」とはっきり答えられたのでありました。夫人はそれから橋本君に祈りを求められました。祈りが終わってから讃美歌を求められました。～515番の愛唱を一同で涙の中に合唱いたしました。～しばらくして夫人はまた私に感謝をしてくれよと求められました。はじめ夫人は夫に祈りを求められ、しばらくして、牧師に祈りを求められ感謝をしてくれと求められた。その「感謝」の一言の内に、夫人の信仰また靈魂の状態は誠によく語られたのでありました。夫人は一生の最後に、過去を振り返り苦しみの中に、神の恩寵、救いの恩寵、その絶大な恩寵を思い起こされ、感謝の念に打たれて「祈り」と言うよりも寧ろ「感謝」と言って、感謝を求められたのでありました。私は夫人の死に迫れる瞬間に感謝に満てるを感謝して、涙の内に感謝しました。そうしてその涙は悲しみと喜びと、喜びと悲しみと不思議に相混じったものでありました。～）

一部抜粋

父はその母幾代について、宣教師と働いていたこと、早く亡くなったことの他にはほとんど語ることがなかった。父は58歳の時、クローン氏病と輸血による肝炎がもとで亡くなった。入院中は心臓が弱い妻のことをいつも気にかけていた。治療の甲斐なく父が弱っていった時、付き添っていた私に「もう死のうかと思うけれど」と穏やかに言ったことがある。今思うとそれは自殺のことではなく、「もう、天国に行こうと思う」という意味だった。父は15歳の時に、病室で子供達一人ひとりと握手し、教会の方達に「もうお引き取り下さい」と別れを告げて、天国へ旅立った母を最期まで見守ったのだ。

昭和48年2月2日夕方、上層階の窓から見える太陽は、ゆっくりと富士山の真後ろに沈み、金色の光が病室の中に差し込んでいた。父が危篤状態とは思えずに、弟と私は父を囲み静かな時を過ごした。その夜容態が急変し、朝早く駆けつけた親族のクリスチャンの方達が祈ってくださり、家族が見守る中父は、はっきりと「さあ」と、まるでこれからどこかに出掛けるかのように言い、息をひきとった。それは私にとって初めての死別体験だった。

父の死から18年後、母が突然心筋梗塞で倒れた時、私は叫ぶように祈った。

奇跡的に回復した母は2年後、末期の癌が見つかり1か月で亡くなった。母の死後、夫の両親の介護と看取り、仕事上のトラブル、病や手術を体験した私は、ようやく神に立ち返った。その後、祖母葬儀の説教原稿写しを見る機会を得て、祖母の信仰を知ると共に、その死に若くして遭遇した父が、4歳で母を亡くし傷つきながら育った妻を愛し、子供の私達に対しても、母を愛し助けていくことを強く望んだ気持ちを理解することができた。私の死生観は祖父母や両親の生死を通して育まれた。私は神の愛を受けて生き、やがて永遠の命を頂くことに希望を持っている。

「継続研究コースの祝福」

石井 由紀（第19期生）

2012年3月にOBIを卒業後、その年の4月から継続研究コースに続いて参加させていただき恵みにあずかり、3年目になります。

私を知る限りのこれまでのメインテーマとしては、2012年度の前期は、OBI講師の先生方より「牧師にとっての有益な信徒像」のお話をそれぞれ伺いました。卒業する前には履修できなかった先生のお話も伺えてよかったです。後期は有志の方々による「自由発表」でした。私は発表には加わらず、もっぱら聞くのみでした。2013年度の前期は「自由発表」を、後期は「神学的論題の探求」としてOBIの講義内容をより深める学びをしました。そして、今年度も前年度の形で継続しています。

それから、同窓会ニュースレターに継続研究コースについて掲載するのは、初めてのことかと思います。そこで、継続研究コースに参加してよかったと思うことを三つ挙げたいと思います。

一つ目には、月1回（第3木曜13:30-15:00）、年10回という無理のないペースで、卒業してもOBI同窓生の交流が続いてできることです。「OBI生は仲が良い」というのが定評と伺いますが、そのとおりだと思われています。毎回、先輩方の近況を伺ったり、アドバイスをいただく中で、とても励まされています。

二つ目には、卒業前の講義の中では学びきれなかった興味深い事柄について、より深く学べることです。例えば、今年度ですと「死とは何か」「説教者としての自己形成」「三浦綾子文学の考察」「『ロゴス』が示す深い意味」「キリスト教古代史の注視点」「諸種ある洗礼、聖餐の考察」「組織神学が示す『人間論』」「『ヘセド』が示す深い意味」「リーダーシップ論における要点」が発表テーマとなっています。そして、ただ一方的な講義だけでなく、自由な質疑応答の時間があり、日ごろ疑問に思っていることや考えていることを聞いていただけて、ご指導や示唆をいただいています。もちろん、発言はせずに発表や講義を聞くだけのときもあり、知らないことばかりだと思いながら学ばせていただいています。

三つ目には、OBI継続研究コースに参加できる「感謝・感激・感動」が、教会にも、また送り出してくれている家族にも広がっていくということです。主と主の教会にお仕えできる者とさせていただいているのは、本当に幸いなことです。また、継続研究コースは、同窓生でなくても、一回のみでも参加できます。仕事をもち忙しい中であってもOBIで学んでみたいという方がおられて、その方は、2013年度はまずこの継続研究コースにビジターとして何回か参加されました。そして、2014年度にはOBIに入学し、聴講生として通っておられます。継続研究コースがあることによって、聖書をもっと学びたいと願っている方のチャンスが広がったのだと思います。

2015年度は、OBI講師の先生方からそれぞれの担当クラス講義のエッセンスを伺えると聞きました。主のお許しがあれば、ぜひ継続して参加したいと願っています。

「主よ！」—麻醉から覚めた時—

有田 貞一（第3期生）

昨年は大病を患いました。皆様が心から熱心に祈ってくださいましたことをこの紙面をお借りして、心より感謝申し上げます。病気の経緯の報告と、小さな証しですが、主に支えられました感謝の証しをさせていただきます。

昨年の6月6日の明け方、西宮市にある実家に家内と一緒に過ごしていた時、急に背中の中右後ろが痛み出し、西宮市内の救急指定病院に行きました。CT検査、超音波検査を受けましたが、胆石が見つからず、病名は「急性胆のう炎」と診断されました。この病気は死亡率が高い病気であることを後で、知らされました。即入院と言われたのですが、「神奈川県の自宅に帰らなければならないのですが。」とお医者さんに言いますと、「即入院です。絶飲、絶食です。今動けば死にます。」と言われ、そのまま入院。土日は、点滴による水分、栄養補給、翌9日（月）から、治療が開始、ドレネージという方法で、胆のう内に溜まっている空気と水を抜く治療が始まりました。この直前に感染症の有無を検査する血液検査を受けておりましたが、その結果、C型肝炎陽性の反応が出たことを医師から伝えられました。肝臓に胆のうが一部癒着していたため、肝臓に関する数値が異常な値を示していました。黄疸もでており、すぐに手術が出来ない状態が続きましたが、数日後に、黄疸も消え、顔色も良くなってきたということで、6月18日に開腹手術を受け、胆のうを切除しました。外科部長と外科医の二人がかりの大手術でした。後で、外科部長の先生から、「今まで、同じ手術を沢山してきたが、今回ののは、難しかった。」と言われました。手術後、歩行訓練などに励んだのですが、ドレン管からの出血が続いたのですが、それも少なくなってきましたので、7月3日にドレン管が抜かれました（これ以上続けると外から菌が入ってくる恐れがあるためとのことでした）。手術後、胆石が10数個でてきましたので、退院時の病名は「胆石性急性胆のう炎」に変わっていました。

入院中は、すべてを主に委ねていました。手術室に入る時、手術後に御国で主にお会いするか、それとも病室に帰ってくるか、いずれであっても、主に感謝しますと決意しました。そして麻醉から覚めて、意識が徐々にもどって来たとき、目を開けるまで、1～2秒ほどの間、思わず「主よ」と言いかけてました。イエス様が御言葉「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいる」に支えられた時でした。実際に目を開けて見ますと、そこは病室で、看護師の方々がおられ、家内もいました。それから体内に残っている血液との戦いが始まりました。この戦いの程度は体温と血液炎症マーカー量の測定で判明します。ドレン管を抜いた直後は、このマーカー量が6mg/dlでしたが、やがて4→2と下がり、7月14日退院後の7月18日は0.74、8月1日は0.46（正常値は0.3以下）まで下がり、神奈川県への帰宅の許可が出ました。その後、職場にも復帰し、体力も回復しつつあります。

手術直後、出血が多くあったため、輸血を受けました関係上、術後2か月経過した時点で、感染症の検査を受けました。その検査の結果（8月30日）、C型肝炎、B型肝炎、白血病、梅毒、エイズすべて陰性でOKという結果が出ました。思わずハレルヤと叫んでしまいました。

「人の齢は70年、健やかでも80年」とあります。今回の経験は70になった年の出来事です。これからの毎日を大切に主のご計画に従って歩んで行きたいと思っています。

すべてを感謝しつつ！

編集後記

今回のニュースレターは、巻頭言をOCC理事長村上先生にお願いしました。また遠隔地で活躍されている方のご活躍の様子ということで、新潟県の二人（平松庸一、阿部幸平）に執筆をお願いしました。そして「私の死生観」（福井ちよ）、「継続研究コースの祝福」（石井由紀）、「主よ—麻醉から覚めた時—」（有田貞一）を載せました。敬称略

（有田）